



近くて近い国に

第8回 ロータリー韓日親善會議開催
2006年9月8～9日

日本のロータリアンを歓迎

「近くて遠い国」と言われる韓国と日本ですが、「近くて近い国」でありたいと願うロータリアンの思いが結集、1,052人のロータリアンと家族が、ソウルのグランド・ハイアット・ソウルで一堂に会しました。

オープニングでは韓国の民族衣装を着た子どもたちが日本と韓国の歌を熱唱し、日本から来た人々に、韓国のロータリアンたちの歓迎の意が伝わってきました。

韓日親善會議委員長の蔡熙秉氏は、第1回日韓親善會議以降、姉妹クラブの締結など両国のロータリークラブの間の交流が活発になり、最近ではマッチング・グラントなどによる奉仕活動へと発展してきたことを例に、この會議の意義、また、両国のロータリアンが協力して世界平和と国際理解のために活動することへの期待について述べました。

日本からは丸山宏日韓親善會議委員会委員長が、韓国のロータリアンに対するお礼を述べ、「今日のように韓国と日本のロータリアンが直接に会って、お互いのロータリアンが意見を交換し友情を分かち合うことは、ロータリーの目的でもあり、国際理解と親善を目指すものです」と続けました。

韓国の金光泰国際ロータリー（R I）理事は、「ロータリー運動を成功に導くのは、コミュニケーションです。

ですから、この會議はこれまでも増して重要な意味をもっていると思います。私はこの度の2日間にわたる親善會議で、両国間の青少年交換計画を中心とする青少年交流が強化されることを願っています」と話しました。日本の重田政信R I理事は「日本と韓国のロータリーは似たところもありますし、異なった点もあります。ビル・ボイドR I会長が言われますように、多様性こそロータリーのもつ強みです。その多様性を、この會議を通じてお互いに認識し、われわれの新しいビジョンを生み出すことに大きな意味があると思います」と述べました。

出席者は、テーブル番号が指定され、日本と韓国のロータリアンと一緒にテーブルを囲むようになっていました。日本語、ハングル、英語、言葉は十分に通じない場面もありましたが、それぞれが手振り身振りも交えながら語り合った晩餐会は、お互いを理解し友情を分かち合う絶好の機会となりました。

勝者のない循環文化

2日目も、韓国の伝統的な楽器や踊りで日本のロータリアンは韓国の文化を十分に堪能することができました。また、日韓それぞれのロータリー現況報告では、活発な活動を報告するとともに、それぞれの報告者が日韓協同のプロジェクトや交流について紹介しました。

今回の出席者が一番印象に残ったのは、李御寧氏の特

別講演でしょう。氏は自身が研究をしている「じゃんけん文明論」について話しました。

「韓国と日本は近くて遠い国と言われましたが、近いからこそ遠い国であるとも言えるのです。ドイツとフランス、イギリスとオランダなど、隣国同士にはいろいろ問題が起こるものなのです。西洋の人は韓国のことをあまり理解してくれません。これは遠い国だから仕方がないと思えるのですが、近いからよく理解してくれているはずなのにとすると、理解してくれないことを残念に思うことがあります。このように、近い国同士というのは問題が生じやすいのです。しかし、両国は同じ文化をもっているから、経済の荒波が立っても、いかなる波が来ても、私たちはお互いに渡ることのできる静かな海をつくることのできたのだと思います」と切り出しました。

「両国の文化は似通っているところもありますが、突き詰めてみると違うところもあります。花札は日本で生まれましたが、今、韓国の人たちはそれは韓国のものだと思っているくらい身近なものです。しかし、そのルールには若干違いがあります。というのは季節が違い、文化が違うからです」と、具体例を挙げ紹介しました。



李御寧氏

そして、本論であるじゃんけんについて、「じゃんけんというのは、生活に根を下ろした文化だと思っています。なぜ、あれだけ多くの遊びの中で、韓国、日本、中国人だけが、共通のこととしてじゃんけんをしてきたのか。西洋の人はじゃんけんではなく、コイン投げを決めます。じゃんけんでは、グーはチョキに勝ちますが、パーに負けます。そのパーはチョキに負けます。このように最も強いものがない。これは素晴らしい哲学だと思います。一つの企業、一つの国がすべての世界を制覇できないように、宇宙、万物はすべて回るものだという循環論が、まさにじゃんけんであるということです」と紹介しました。

協力をしながら競争する

「韓国と日本がサッカーの世界ドカップを共同で開催したとき、韓日にするのか日韓にするのかでもめました。物事には順番がありますが、じゃんけんには、それがありません。じゃんけんでは、むしろ先に出した方が負けます。先に出すと不利になり後にだ



日本のロータリーの現況報告をする黒田正宏日韓親善委員会連絡幹事

すと有利になります。戦争を抑制する方法も、じゃんけんしかありません。先制攻撃をすると負けるということなら、先制攻撃はしません。戦争というのは、先制攻撃をしたから戦争になったのです。ですから、先制攻撃をする人が不利になるような条件をつくれば、戦争は起こらないでしょう。じゃんけんをするときは掛け声を合わせ息を合わせてやらなければなりません。日韓関係においても、じゃんけんのように、同時性と協力をすること、協力をしながら競争をするというルールを守ることができれば、世界で最も素晴らしい関係になると思います」と示唆しました。両国のロータリアンの今後の関係構築において、この言葉は大きな意味をもったことでしょう。

會議は双方の国の言葉の通訳がつかいましたが、出席者同士の会話は英語という場面も多く見られ、これが国際會議であることが実感できました。お互いに似てはいるものの、一方で異なる面もあるのだということを認識し、国際理解の第一歩としてより良い関係を築かなければならないと感じた出席者も多かったことでしょう。

最初から最後まで、今回の會議を主催した韓国のロータリアンの會議に寄せる熱い思いが表れた會議となりました。次回は、2007年青森で開催される予定です。

取材『友』編集長 二神 典子

『友』ホームページに、本會議の写真を掲載しています。

